

機関番号：14602

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009 ~ 2010

課題番号：21720093

研究課題名 (和文) ニューイングランド地方主義作家によるヴァンパイア表象研究

研究課題名 (英文) A Study of New England Regionalists' Representations of Vampires

研究代表者 中川 千帆 (Nakagawa Chiho)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：70452026

研究成果の概要 (和文)：当該研究は 20 世紀への変わり目に書かれたニューイングランドの女性作家によるヴァンパイア物語に見られるジェンダーとセクシュアリティを探るものであると同時に、現代のヴァンパイア・ロマンス人気の背後に見られるジェンダー・ポリティックスも明らかにするものである。

研究成果の概要 (英文)：This research investigates the gender politics seen in the representations of vampires, focusing primarily on the ones by New England regionalists at around the turn of the 20th century, and on the popular vampire romances today written by and targeted at women.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：米文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ヴァンパイア、ニューイングランド、地方主義、ジェンダー、ロマンス

1. 研究開始当初の背景

アメリカ文学研究において、ゴシック小説の研究は特殊な限られたものとして存在してきた。イギリス文学の元祖ゴシック研究においては、体系化が進み、女性ゴシックと男性ゴシックというサブジャンルが成立していることからわかるように、女性作家によるゴシックに確固とした伝統が存在する。一方、アメリカの女性文学に「ゴシック」と呼べるものはほとんどなく、アメリカ文学と女性文学の正典となったシャーロット・パーキンス・ギルマン(Charlotte Perkins Gilman)の「黄色い壁紙」(“The Yellow Wallpaper”)を除いては、特に「ゴシック小説」として読まれ

てきたものはなかった。その理由はアメリカ文学の特徴やアメリカの土壌におけるゴシック理解という点から議論ができるところであるが、この研究はアメリカ文学における女性ゴシックの不在について論じることを目的としてはいないため省略する。しかし、同時期、19 世紀後半から 20 世紀初頭の、当時高い評価を得ていた——現在、比較的軽視されがちではあるが——「地方主義作家」たちの作品のなかには、「ゴシック」と呼ぶことができなくないものがある。彼女たちに対しては自分の住む地方の風物を「リアリズム」によって描き出したとされる評価が通例である。だが、これらの作家は同時に超自然

物語をも書き残している。その中でメアリ・E.ウィルキンス・フリーマン (Mary E. Wilkins Freeman) とイーディス・ウォートン (Edith Wharton) の作品が、双方とも女性のヴァンパイアが登場する短編小説を書いていることに注目し、その作品とテーマを研究することにした。このヴァンパイア表象研究は、世界的にヴァンパイアをテーマとする小説、TV番組、映画が大流行するなかであって、広く応用可能な研究である。

2. 研究の目的

この研究では、元来東欧のイメージを持つヴァンパイアをアメリカに舞台を移して描かれているものを対象とする。特に焦点を当てるのは、ヴァンパイア表象のジェンダーやセクシュアリティの側面であり、中心とする作品はニューイングランドを舞台とする女性のヴァンパイアを描いた物語であるフリーマンの「ルエラ・ミラー」 (“Luella Miller”) とウォートンの「魅入られて」 (“Bewitched”) である。

具体的に取り上げるのは、ニューイングランドという土地特有の歴史や文化がこの二人の女性作家のヴァンパイア表象にどのように影響を与えているのか、風俗や伝説がどのように取り込まれているのか、女性のヴァンパイアが彼女たちのジェンダー観や政治経済観をどのように反映して描かれているのかなどの点である。この研究を進める過程において、ニューイングランドの女性ヴァンパイアに限られない、ヴァンパイア物語についての幅広い研究も同時に必要とされることは言うまでもない。当該研究は、ヴァンパイア表象全体に対する幅広い知識、深い考察に基づいて、女性作家たちが描くヴァンパイアたちの持つ意味を浮かび上がらせようとする研究である。

3. 研究の方法

個々の作品をフリーマンとウォートンの他の作品と結びつけながら分析を深めるとともに、ニューイングランドの歴史・風俗に対する知識を深め、かつその他のヴァンパイア物語との比較考察のなかから、これらの作品の持つ意義を、既存のフリーマン研究とウォートン研究の方法論に囚われない手法を採用することによって、それらに対する貢献となる研究となることを目指す。

4. 研究成果

(1) 民俗伝承としてのヴァンパイア物語

フリーマンとウォートンの作品に共通するヴァンパイア描写の特徴は、二人のヴァンパイアとされる女性がどのように吸血行為

を行い、実際に殺人を行うかという描写がまったくないことである。ほぼ同時代に描かれたブラム・ストーカー (Bram Stoker) の『ドラキュラ』 (*Dracula*) のような華やかさ、そして残酷さは存在しない。フリーマンとウォートンが描くニューイングランドは、20世紀への変わり目の経済的に衰退していく外界から孤立した小さな村であり、物質的・精神的な荒廃を背景としている。従って、これらの作品のヴァンパイアは、大西洋の反対側で一世を風靡したヴァンパイアとは違い、ニューイングランドの民俗伝承としてのヴァンパイア伝説が根底にあると考えるのが妥当であろう。ポール・バーバー (Paul Barber) の *Vampires, Burial and Death: Folklore and Reality* (New Haven: Yale UP, 1988) は、ヴァンパイアの正体についてのさまざまな説を紹介しており、昏睡状態のまま葬られた人、ポルフィリン症患者などを挙げた後で、掘り起こした死体について (再液化化した) 血液を目撃した結果の死体勘違い説を挙げている。スレジックとベラントーニ (Paul S. Sledzik and Nicholas Bellantoni) の文化人類学的研究では、ニューイングランドで結核患者をヴァンパイアとして疑ったケースが見られるとしている。このように、自然・医学的現象を限られた知識・環境のなかで理解しようとした結果がヴァンパイアの民俗伝承であり、これらの小説もそれを背景としていると考えられる。

(2) 女性のモンスター表象としてのヴァンパイア

フリーマンとウォートンの作品に特徴的なのは、上に挙げた『ドラキュラ』と違い、ヴァンパイアが女性であることである。『カミーラ』を始めとする女性ヴァンパイアは、相手に死をもたらす悪女/ファム・ファタールであり、女性に課せられたルール・規範を逸脱した女性として描かれると同時に、女性への秘められた恐怖を体現する存在として描かれることが多い (特に参照すべき研究として、Nina Auerbach の *Our Vampires, Ourselves* [Chicago: U of Chicago P, 1995] が挙げられる)。だが、フリーマンの作品に描かれるルエラ、とウォートンの作品に描かれるオーラとヴァネッサは、悪女とは言いがたい。彼女たちは性的魅力に溢れた美しい女性であるという点で、悪女/ファム・ファタールの一つの条件は満たしているが、悪意の欠如という点で一般的なファム・ファタールのイメージからはかけ離れている。彼女たちは無垢とも言える存在で、意図せずに男性たち、時によっては女性たちをも魅了する。だが、同時に彼女たちはその魅力によって近づいた人々の精気・生気を奪い、死へと至らしめてしまう。彼女たちは愛されるその性質と無垢な依存

性によって人を殺すのである。

この「ヴァンパイア体質」は女性のセクシュアリティが積極的に表現されることに対する恐怖として描かれるファム・ファタールとは反対の性質である。飽くまでも受身で、他者に依存する「女性らしさ」によって、相手を破滅させる力を持つ彼女たちは、家父長制における権力構造の不均衡に抵抗し、男性に対する復讐を自ら持って任ずる悪女ではない。無垢な悪女たちは、社会的に求められる女性性を完全な形で体現することにより、破壊性を持つのである。破壊性という点から言うなら、彼女たちも広義ではファム・ファタールと呼べるだろう。しかし、この二人の女性の作家によって描かれるファム・ファタールは、男性に、または社会に求められる「女性らしさ」の究極の形であり、周りの精気を奪いつくす悪意のない悪女なのである。この二人を糾弾する女性たち、そしてこの二人を描いた女性作家たちは、「理想の女性性」の破壊性を指摘することにより、当時のジェンダー観に対する反抗を表明していると言えるだろう。

(3) ヴァンパイアと魔女

ニューイングランドを舞台とするこの二つの作品に、社会・歴史的にニューイングランドの歴史に大きな傷跡を残す魔女狩りの歴史が影を落としていることは明らかである。主人公の女性たちは、男性を魔法にかけている(bewitched)と糾弾される。多くの場合のように、異性に対する不思議なまでの単なる強い魅力を意味する言葉として使われるのではなく、これらの作品では“bewitching”という言葉は、この二人の女性が忌み嫌われるべき恐ろしい存在であることを意味し、排除されるべき存在として認識されるコードワードとして使われる。つまり、“bewitching”という言葉によって、彼女たちは魔女として認定されるのである。

この研究においては、これらの物語がヴァンパイア物語であるとして論じてきているが、二人の女性がどのように忌み嫌われる存在として特定され、糾弾され、そしてその糾弾がどのような経過を辿って収束するか、または悲劇的な結末を迎えるか、という部分は、魔女狩りの物語として読むことによってより明らかになる。歴史学の分野で進められてきた魔女狩り研究(もっとも重要とされる Paul Boyer and Stephen Nissenbaum の *Salem Possessed: The Social Origins of Witchcraft* を始めとし、Elizabeth Reis の *Damned Women: Sinners and Witches in Puritan New England*, Carol F. Karlsen の *The Devil in the Shape of a Woman: Witchcraft in Colonial New England* 等を参照)において議論されているように、魔女狩りの背景には様々な政治経済的要素が

存在する。多くのフェミニストが論じているように、魔女狩りの歴史は家父長制に対する女性の抵抗と抑圧だけを意味しているのではない。上記の研究が示唆することは、魔女狩りとは共同体における不要な者の排除行為であったということである。それにジェンダーという変数が大きく作用していることは疑いようもないが、謂れのない追及が共同体からの追放という判決へと導かれるためには、それに加えて政治経済的に不要な存在としてみなされているという要素が必要だったのである(例えば、John Demos は *Entertaining Satan: Witchcraft and the Culture of Early New England* において魔法使いとして排除されたある男性が、生産的ではなく、共同体の男性たちに害を及ぼしかねないと思なされる同性愛的傾向を持っていたことを示唆している)。これらの作品では、愛情を勝ち取るためのライバルを排除しようとして、愛されない女性たち——魔女狩りの歴史においては、魔女として排除される可能性が高い女性たち——が、愛される女性たちを「魔女」として追及する。だが、しかし最終的には、これらの作品でも歴史的な魔女狩りの実例と同じく、女性の共同体に対する役割に対する価値観——子供を生ず能力を持つかどうか——によって、それぞれの女性たちが共同体全体により「魔女」として認定されるかどうか決定されている。しかし、「ルエラ・ミラー」では子を持たない既婚のルエラに対する糾弾は、一時的なものに留まる。魔女狩りの時代と19世紀後半までの間に既婚の女性の権利が大幅に増大したことが、この結果に反映されていると言える。

この魔女狩りの研究は、最初から研究の対象としたものではない作品にも応用することができる。20世紀半ばの作家シャーリー・ジャクソンは、セイラム村の魔女狩り裁判について子供用に本を書いたことからわかるように魔女狩りの歴史に強い興味を示していた。自分自身、ニューイングランドの村(ヴァーモント州のノース・ベニントン)において排除されていることを意識し、自嘲気味に「ベニントンの魔女」を名乗っていた。シャーリー・ジャクソンの魔女狩りの歴史に対する深い洞察は、彼女のもっとも反社会的とも言える作品『ずっとお城で暮らしてる』(*We Have Always Lived in the Castle*)に表されており、魔女と呼ばれる女性たちが息が詰まるような密接な共同体のなかで排除されていく過程を描いている。

(4) 現代のヴァンパイアたち

この研究を進めている間、アメリカを中心に特に一世を風靡していた(そして今もし続けている)のが、『トワイライト』サーガ(*Twilight saga*)を中心とするヴァンパイアをテ

一マとする小説・ドラマ・映画である。特に『トワイライト』は小説だけではなく、映画が爆発的なヒットを記録している。サイドプロジェクトとして、ニューイングランドのヴァンパイア表象研究で行った研究を応用し、現代のヴァンパイア・ロマンス小説に見られるヴァンパイア表象の意味を考察した。

『トワイライト』サーガと『サザン・ヴァンパイア・ミステリーズ』(*The Southern Vampire Mysteries*) / 『スーキー・スタックハウス・ノベルズ』(*Sookie Stackhouse Novels*) (ドラマ名は『トゥルー・ブラッド』) の特徴は、ヒーローとなるヴァンパイアたちがもはや人間の血を食料とすることを自主的にやめた「ベジタリアン」であり、禁欲主義者であることである。これらの作品に大きく影響しているのは、『ドラキュラ』以来の伝統的なヴァンパイア像である。『トワイライト』においても『サザン・ヴァンパイア』においても、影を持つ貴族的なヴァンパイアは出会いがしらに主人公の少女たちの心を奪う。しかし、命の危険を伴うはずのヴァンパイアとのロマンスは、上に述べたヴァンパイアの禁欲主義のために危険度が飛躍的に下がったものとなっている。この部分の研究では、ロマンスヒーローとしてのヴァンパイアをより深く理解するために、ポピュラーロマンスの研究を取り入れた。

この新しいヴァンパイア像は、ロマンスにおけるヒーロー像の変化を反映するとともに、ロマンスにおける障壁の質の大きな変化を表している。今までのロマンスでは、ヒロインたちがヒーローたちの真意を計りかねて、本当は恐ろしい悪漢なのかもしれないと不安を抱き、感情を表現しないヒーローたちを「解説」することが彼女たちの大きな課題であった。ヒーローに対する誤解が解けると同時に、ロマンスが成就するというのが従来のパターンである。一方、新しいヴァンパイア・ロマンスではヴァンパイアたちは感情を表現し、安全であることを十分にアピールする。ヴァンパイアたちは、もはや人間を殺さないのみならず、絶えずヒロインたちの不安や誤解を取り除こうと努力することにより、冷酷で不可解な存在ではなくなっている。このようなヒーロー相手には、ロマンスの成就の前に必要不可欠な障壁が存在しないことになってしまう。その欠如を埋め合わせるかのように、これらの物語ではヒロインたちが自分自身で障壁を作り上げている。ヒロインたちは、他者に対する疎外感や孤立を感じ、他者との間に感情的な障壁を張り巡らしているのである。それが意味するのは、彼女たちの他者に対する異常に強い忌避感である。物語が進むに従って、彼女たちは成熟した他者とのコミュニケーションを学び、他者を受け入れることができるようになることによ

り、これらの障壁は取り除かれることになる。しかし、ロマンスの成就における障害を少女たちの側のコミュニケーション能力の問題とすることは、これらの物語のなかの少女たちがジェンダーによる力の不均衡の問題に無自覚であり、男性性一般に対する危機感をもはや強く感じていないことを示すものである。

この分析結果から導き出されることは、保守化傾向を示すアメリカ社会における新しい(退行した)ジェンダーとセクシュアリティの認識である。これらの物語は、男性たちを恐れる理由がなくなった家父長制が消滅した世界でのロマンスではない。飽くまでもヴァンパイアたちは肉体的にだけではなく、政治経済的にもより強大な存在であり、ヒロインたちは身体的、社会的双方の点において、無力な存在である。少女たちは貧しく、ヴァンパイアたちは強力で裕福である。結果として、少女たちは力の不均衡を受け入れたまま、恋愛の成就、つまり結婚という結末に辿りつく。ヴァンパイアたちが永遠に年を取らないように、成就の瞬間の蜜月が永遠に続くと感じて。家父長制を基盤とした権力の不均衡から生じる脅威を恐ろしいものとは認識せず、力を持つ男性性との連盟に障壁となるのは自分の過剰な警戒心である、とする現代のヤングアダルトロマンスは、現在のジェンダー観の一面を切り取ったものとして理解することができるだろう。

(5) ヴァンパイアと病—病と道徳性、遺産と精神病

このようにヴァンパイア研究をする上で、さまざまな方向へと分岐して研究を行ったが、時を20世紀への変わり目のニューイングランドへと戻すと、超自然現象として解釈された症状をより深く理解するためには、当時の身体・病気に対する概念を理解する必要があると考えられる。この時点ではすでにヴァンパイア研究から次の段階へと移行していることから、この部分はこの研究の成果というよりは、次の研究への土台であると考えている。

文化人類学的視点からすれば、最初の部分にも述べたようにヴァンパイアとされ、他者に死をもたらす加害者とされた者は、単なる結核の患者であったと考えられる。少しずつ衰弱した末に死をもたらす正体不明の病気に対する大きな不安が背景にあったと言えるだろう。「ルセラ・ミラー」ではその正体不明の病気をもたらすものは結核患者であると同時に、ヒステリー患者であったことも示唆されている。アメリカにおいては、ヒステリーと同様の症状に対して、「神経衰弱」(*Neurasthenia*) という診断がよく下された。この病に関してジョージ・ミラー・ピアード

(George Miller Beard)がアメリカ的なものだと主張し、ウィリアム・ジェームズ(William James)も「アメリカ病」(Americanitis)と名づけている。そして、安眠療法を主張したサイラス・ウィアー・ミッチェルは、『脂肪と血液』(Fat and Blood)において「ヒステリーの少女はウェンデル・ホームズも言っているように、健康な人の血を吸うヴァンパイアだ」とも言っている。ミッチェルに立ち戻ることは、またアメリカの女性ゴシックを書いたギルマンへと立ち戻ることでもある。そして、これらの病への捉え方のなかに、道徳的な価値判断が見られることも無視できない。病の概念は、時代精神の側面でもあるのだ。現在のところ、ミッチェルの言うウェンデル・ホームズ(法律家の息子のジュニアの方ではなく、父親のシニアの方であると考えられる)の引用の原典は確かめられていないが、医師である彼の医学小説にその答えがあるのではないかと推測される。これらを初めとし、ヴァンパイアの害——ヒステリー、神経衰弱、結核——を探ることは、20世紀の変わり目の文学の背後にある、アメリカでの身体・病をめぐる概念を明らかにすることにつながると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Chiho Nakagawa, “New England Witches and Vampires: Invisible Magic and Malice”, 奈良女子大学文学部研究教育年報、査読無、第七号、2010、61-69
- ② Chiho Nakagawa, “How to Make a Witch—Shirley Jackson and Femininity”, 外国文学研究、査読無、第28号、2009、63 - 84

[学会発表] (計2件)

- ① Chiho Nakagawa, “Safe Vampire Heroes and Safe Sex in New Vampire Romance” International Conference on Popular Romance—Poplar Romance Studies: Theory, Text, and Practice Brussels, Belgium, 8/7/2010
- ② Chiho Nakagawa, “Narratives of Unspectacular Vampires: New England Witches and Vampires” Ninth Biennial Conference of the International Gothic Association: Monstrous Media/Spectral Subjects, Lancaster University, Lancaster, U.K., 6/21/2009

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 千帆 (Nakagawa Chiho)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：70452026